

令和5年度 南関町立南関第二小学校校内研究推進計画

(1) 研究主題

「わかった」「できた」を実感できる算数科の授業
～数学的活動により学ぶ楽しさやよさをあじわう授業をめざして～

(2) 主題設定の理由

ア 学習指導要領改訂の経緯から

社会的な学力向上の要請から、平成29年3月、「小学校学習指導要領」が告示された。これまで大切にされた「生きる力」の育成という目標は継承されつつ、社会の変化を見据え、新たな学びへと進化を目指すことになった。新しい時代を生きるために必要な力が、「(学んだことを人生や社会に生かそうとする) 学びに向かう力・人間性等」、「(実際の社会や生活で生きて働く) 知識及び技能」、「(未知の状況にも対応できる) 思考力、判断力、表現力等」の三つの柱として、すべての教科で整理された。さらに、「何を学ぶか」だけではなく、「何ができるようになるか」を目指し、主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善が重視されている。

イ 本校の教育目標から

本校の教育目標は、「かしこく・やさしく・たくましい『さかきっ子』の育成」である。本研究において「わかった」「できた」を実感できる算数科の授業を進めることが、「考える力」「協働する力」「がんばり抜く力」を培い、本校の教育目標に迫ることとなる。

【めざす子供像】

- ・しっかり考える子供
 - ・人にやさしい子供
 - ・粘り強く、たくましい子供
- #### 【育てたい力 (資質・能力)】
- ・考える力
 - ・協働する力
 - ・がんばり抜く力

ウ 「熊本の学び」アクションプロジェクトから

子どもたちの基礎学力を保障するため、令和3年度から5年度までの3年間、熊本県全体で「『熊本の学び』アクションプロジェクト」が進められる。このプロジェクトでは、「誰一人取り残さない学びの保障」、「教員一人一人の授業力向上」を柱としている。「誰一人取り残さない学びの保障」では、達成感や学習意欲が生まれるように「わかる・できる」まで一人一人に関わり、「個に応じた指導・習熟度別指導の拡充」、「読み・書き・計算の習得の徹底」、「定着確認の徹底」、「読解力向上の取組実践」が重点取組事項となっている。また、「教員一人一人の授業力向上」では、学校組織一体となって、教員一人一人の授業力向上を目指し、行政による「学校運営に関する助言の強化」、学校管理職による「授業観察の習慣化」、「校内研修内容の重点化」、教員による「構想・省察の習慣化」が重点取組事項となっている。

エ 児童の実態から

(ア) 標準学力検査の結果から

	新2年	新3年	新4年	新5年	新6年	全体
国	65.9	55.0	51.3	50.0	52.5	53.6
算	64.3	61.3	51.2	54.9	57.7	56.5
社			47.1	50.5	55.4	51.2
理			52.8	48.1	50.1	50.5
総合	65.4	58.5	50.6	51.1	53.9	54.4

学校全体の学力偏差値は、55.9で良好であるが、個人差が見られ、基礎的・基本的な事項の定着が不十分な児童がいる。また、学力の土台となる主体的に学習に取り組む態度については、全体的に更に高める必要がある。

(イ) 県学力調査の結果から

令和4年度 熊本県学力調査結果「定着率」(県を100としたとき)					
		新4年	新5年	新6年	
算数	教科全体		76.7%(104)	71.3% (103)	81.3% (126)
	基礎		84.6% (107)	75.0% (100)	87.6% (123)
	活用		65.1%(100)	63.0% (112)	60.4% (129)
	領域	数と計算	76.9%(108)	75.0% (107)	84.6% (122)
		図形	79.5%(102)	61.7% (92) ▼	72.5% (123)
		測定 変化と関係	75.0%(97)	72.5% (113)	100% (153)
		データの活用		55.0% (82) ▼	69.2% (146)
	観点	知識・理解	81.7%(107)	74.2% (101)	87.3% (123)
		思考・判断・表現	61.5%(97)	62.5% (109)	69.2% (129)
		主体的に学習に取り組む態度	64.1%(96)	48.0% (103)	78.5% (147)

※ 「▼…県の定着率を100としたとき、95以下」

熊本県学力・学習状況調査の結果から、全体として県平均を上回っている。今後も数学的活動の工夫をしたり、「協働的な学び」の場の設定をしたりすることで、児童の学習に対する意欲を高め、定着を図っていく。

(3) 研究主題について

ア 研究主題について

「わかった」とは

児童が課題に対する答えだけでなく、解決への道筋や方法、理由をとらえることができた状態である。

「できた」とは

自分が考えたことを、言葉や図、式、表やグラフなどの数学的な表現の方法を用いて、表すことができた状態である。

「わかった」「できた」という実感が、喜びや満足感、「もっとやりたい」という更なる追求心、活用する力につながると考える。

イ 「数学的活動」について

数学的活動とは、事象を数理的に捉えて、算数の問題を見だし、問題を自立的、協働的に解決する過程を遂行することである。数学的活動においては、単に問題を解決するのみならず、問題解決の過程や結果を振り返って、得られた結果を捉え直したり、新たな問題を見いだしたりして、総合的・発展的に考察を進めていくことが大切である。この活動の様々な局面で、数学的な見方・考え方が働き、その過程を通して数学的に考える資質・能力の育成を図ることができると考える。

具体的な活動

- ・具体物を使って考える
- ・集める、分析する
- ・調べる、理解する、表現する
- ・実際に作る、構成する、分解する、観察する

念頭の思考活動

- ・いろいろ考える
- ・推理する
- ・統合する
- ・簡潔にする
- ・発展させる
- ・他と関連付ける

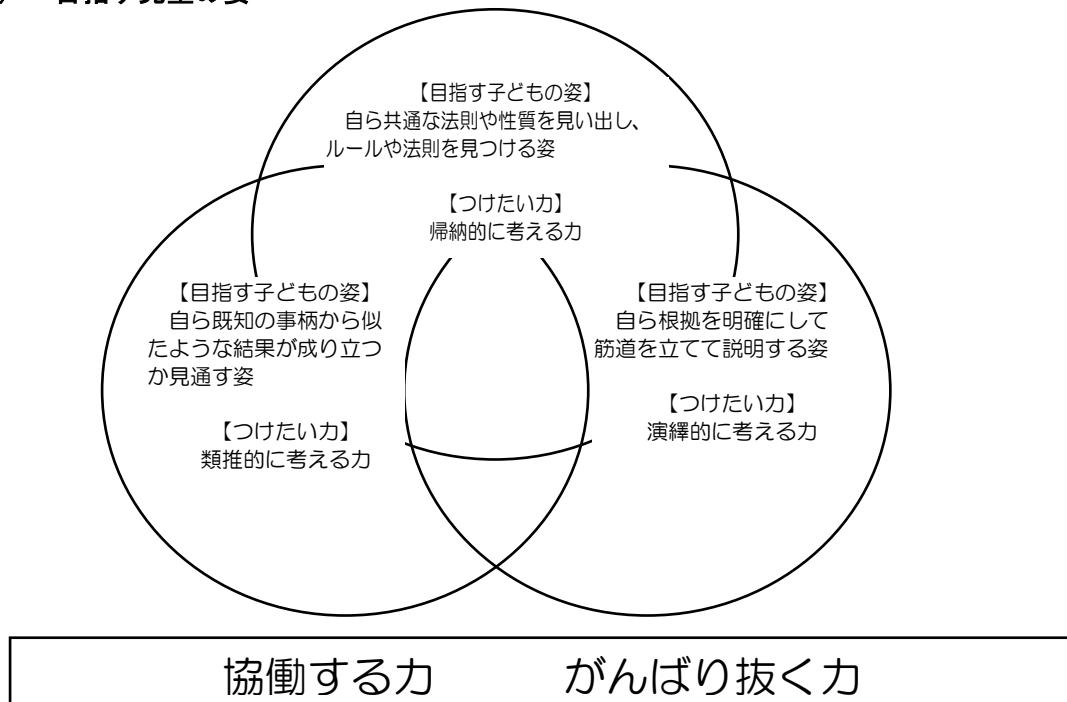
数学的活動を取り入れる

- ・活動を通して課題をつかむ
- ・活動を通して発見する、創り出す
- ・活動を通して定着を図る、生かす

ウ 「学ぶよさをあじわう」について

数学的活動・協働的活動を通して学んだことから、「より速く簡単に解けた。」「よりよい方法で解けた。」などとよりよい学びを追究し、「この場合でもできるかな。」「身の回りで生かせることはないかな。」などと学びを深めたり広げたりすることが算数を学ぶ楽しさやよさをあじわうこととなると考える。

(4) 目指す児童の姿



(5) 研究の仮説

仮説 1

学びの意欲を高める工夫を取り入れれば、児童が学ぶ楽しさとよさをあじわい、「わかった」「できた」を実感することができるであろう。

授業において、児童の学びの意欲を引き出すキーワードを設定することで、児童の思考を促したり、補助したりすることができ、児童が学ぶ楽しさとよさをあじわうことができると考える。

仮説 2

学びの支援を充実する工夫を図れば、児童が算数の楽しさやよさをあじわい、「わかった」「できた」の実感をもつことができるであろう。

児童を誰一人取り残すことなく育成する「個別最適な学び」と「協働的な学び」とを一体的に充実させることで、主体的・対話的で深い学びの実現につながり、児童が「わかった」「できた」の実感をもつと考える。また、「協働的な学び」をすすめることが、「自分を表現する力」や、「協働して解決し、創り出す力」を高めることにつながり、児童一人一人が算数の楽しさやよさをあじわうことができると考える。

仮説 3

学びの定着を図る工夫を取り入れれば、基礎基本の定着が図られ、児童が「わかった」「できた」の実感をもつことができるであろう。

自分の学びを蓄積させて自分の成長を確かめられるような振り返りをしたり、友達から学んだことがわかるような振り返りをしたり、繰り返し練習をしたりすることで、基礎基本の定着が図られると考える。また、授業で確実に適用題を実施し、授業と連動した家庭学習を取り入れるなど、学びの定着を図る工夫を充実させることが、基礎基本の定着につながると考える。

(6) 研究の構想

ア 研究の視点と具体的な実践事項

研究の視点	具体的な実践事項		ICTの活用
【視点1】 学びの意欲を高める工夫 <u>『難関突破力』</u> <u>「考える力」</u>	ア 数学的活動の工夫 イ キーワードの設定	○数学的活動の明確化 ○日常の事象から探し、生活に生かす問題。 ○事象を数理的に捉えるキーワード。	・電子黒板の活用 ・日常の場面を問題に取り込む
【視点2】 学びの支援を充実する工夫 <u>『自分を表現する力』</u> <u>「協働する力」</u>	ア 個別最適な学びの支援の工夫 イ 「協働的な学び」の場の設定	○主体的・対話的で深い学びを意識した授業過程。 ○個に応じた手立て。 ○数学的に処理するよさを実感できる協働的な学び。	・自力解決時のタブレット活用 ・SkyMenuによる共有
【視点3】 学びの定着を図る工夫 <u>『難関突破力』</u> <u>「がんばり抜く力」</u>	ア 家庭学習の工夫 イ 適用題の場の設定	○日常の事象や生活に生かす適用題。 ○県学調や全学調を活用した適用題。 ○家庭学習の手引き等の活用と動機付け。	・タブレットを活用した家庭学習 ・MEXCBTの活用

イ 研究の構想図



